

しみ

生成と腐蝕の重なり

配置図 S=1:200

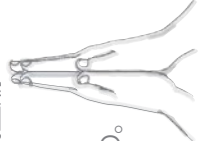
- コンセプト -

故人の人生を可視化する、木廟のある森をつくる。
現代では偲ぶ場が儀式的になり、故人との距離が遠くなりつつある。
故人と残された人を繋ぐ廟を苗木の成長に呼応させるようにつくる。
年月を経て、木廟が朽ちそこに葬られた人々もいずれば、忘れられていく。
石に名前を刻み、一生残していこうとするのではなく、忘れられてしまいうことを受け入れることによって森が回復していく。

- 木廟（もくびょう） -

廟（びょう）・・・死者をまつる場所。埋骨される場合とそうでない場合がある。お墓とは違い建造物があることが特徴。
中国での歴史が長く、日本では大きく神式霊廟、仏式霊廟
儒式霊廟などに分けられる。

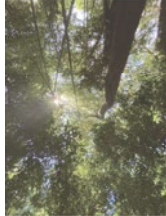
木廟（もくびょう）・・・樹木葬に偲ぶ空間を与えたもの。
造語であり過去に事例は見当たっていない。



- 敷地 -

福岡県福津市須多田

- ・人口が減少傾向にあったが、子世代が戻ってきている。
- ・町内会のコミュニティが残っている
- ・高齢化により竹林問題が進行し、竹林と広葉樹が混在している。



- 背景 -

現代におけるお墓は何ためのもの？

亡くなった人の居場所のため
・生きていたという証を残したい。
・家族と一緒にの場所でありたい。
・代々引き継いでいきたい。

残された人々が寂しくないように
・手を合わせ場所がわかりやすい。
・家族の心のよりどころとして、特別な場所を設けたい。

自身も含めた人を想うために必要なモノである

毎日仏壇に手を合わせるだけじゃなくて、ふとした時に思い出すだけじゃなく、自身を含む対相手を想う気持ちを形にしたいという願いから始まったのではない。毎日何百時間と共に過ごした家でも、いつも座っていたソファでもなく、想う人の象徴を形にして特別だと大切に守っていく。

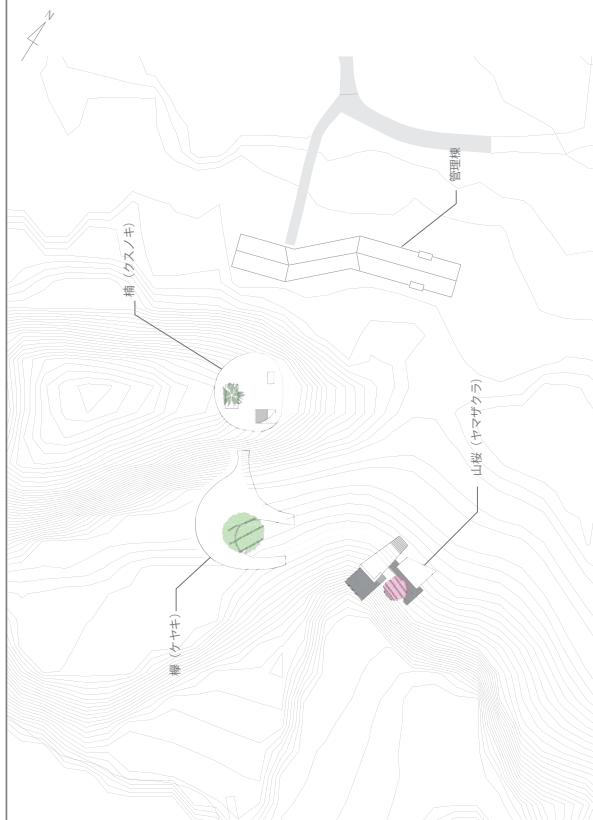
誰かを想うにはきかけが必要である

想われる人、想う人。彼らに取って本当に特別な時間とは何だったのかもし大切な人と過ごす時間を具現化することが出来たら、他の誰のものでもない彼らだけの特別を守ることが出来るのではない。時間の具現化装置として建築が介入することで、特別な空間を生む。

- ダイアグラム -

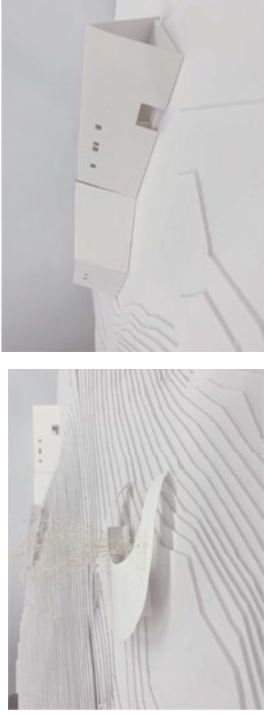
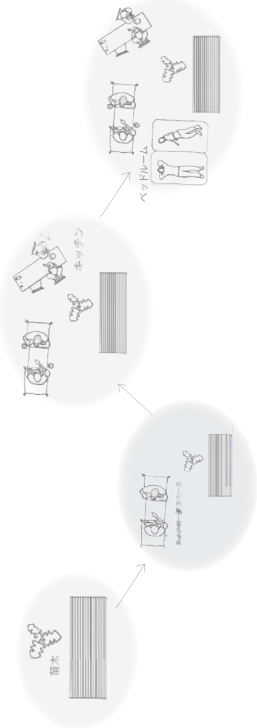


— 全体概要 —



時間経過とストーリー――

木の成長（時間経過）に合わせて思い思いに機能や空間を付加させていく。
生前の故人又は依頼人が増築をやめたと、木廟は完成し建築の死を迎え始める。



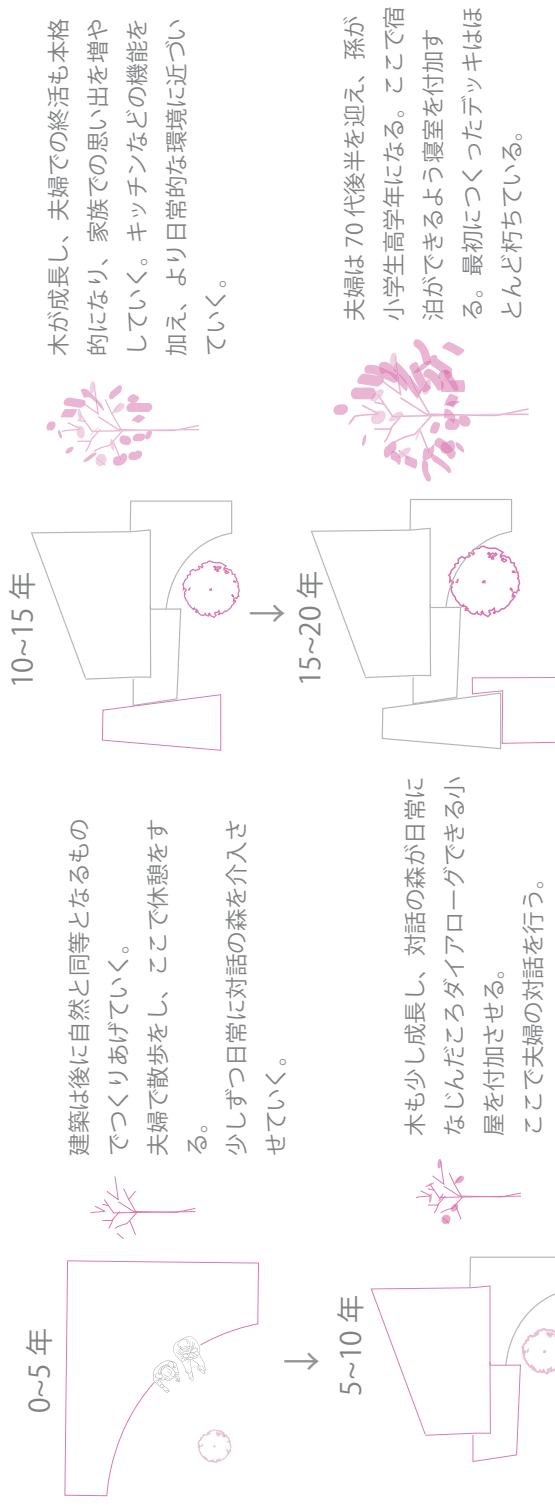
校山

例)

依頼人：60代夫婦

目的：夫婦の終活のため

由野：子供達にお臺の面倒を掛けたくない



木は立派な木として成長し、夫婦の終活の想いを担ったこの小屋もゆっくりと朽ちていく。日常の延長が特別な思い出となり、建築がその思い出を記憶する。

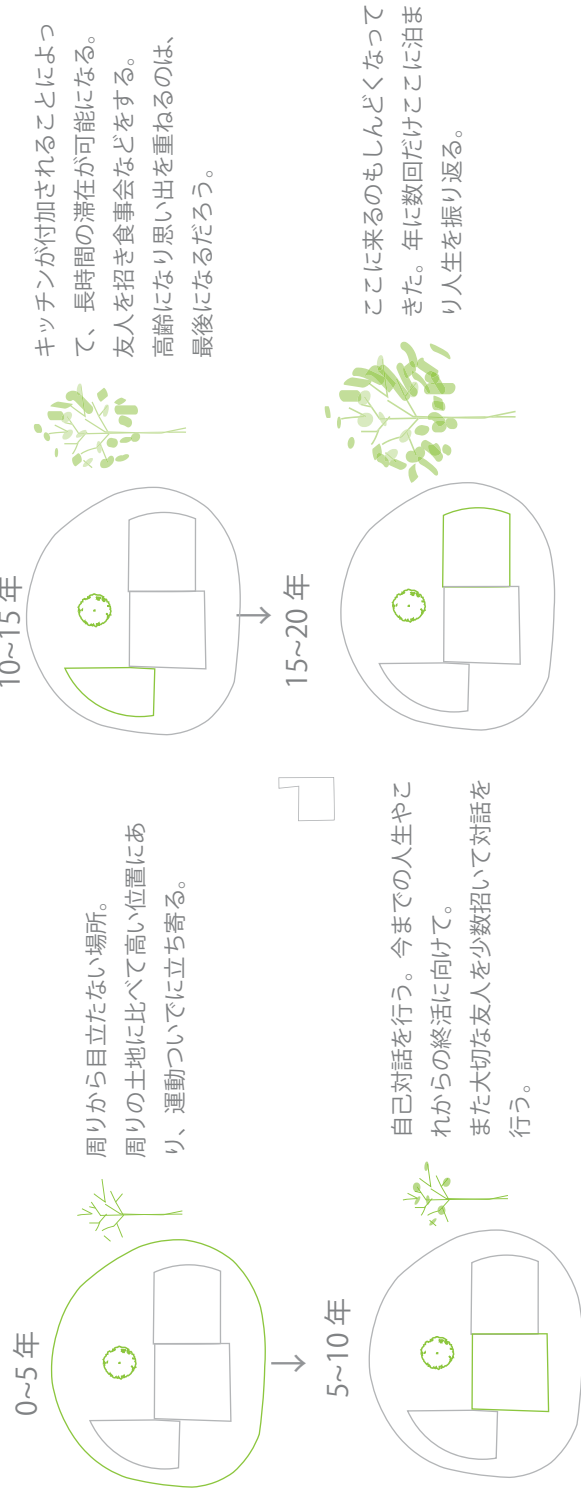
楠

例)

依賴人：60代單身男性

目的：老後ゆっくりできる場所が欲しい

理由：生きた証を残したい



木は立派な木として成長し、故人となった彼の思い出を記憶する。形として残りつつも使われなくなった建築は役目を全うし、森に滲んでいく。

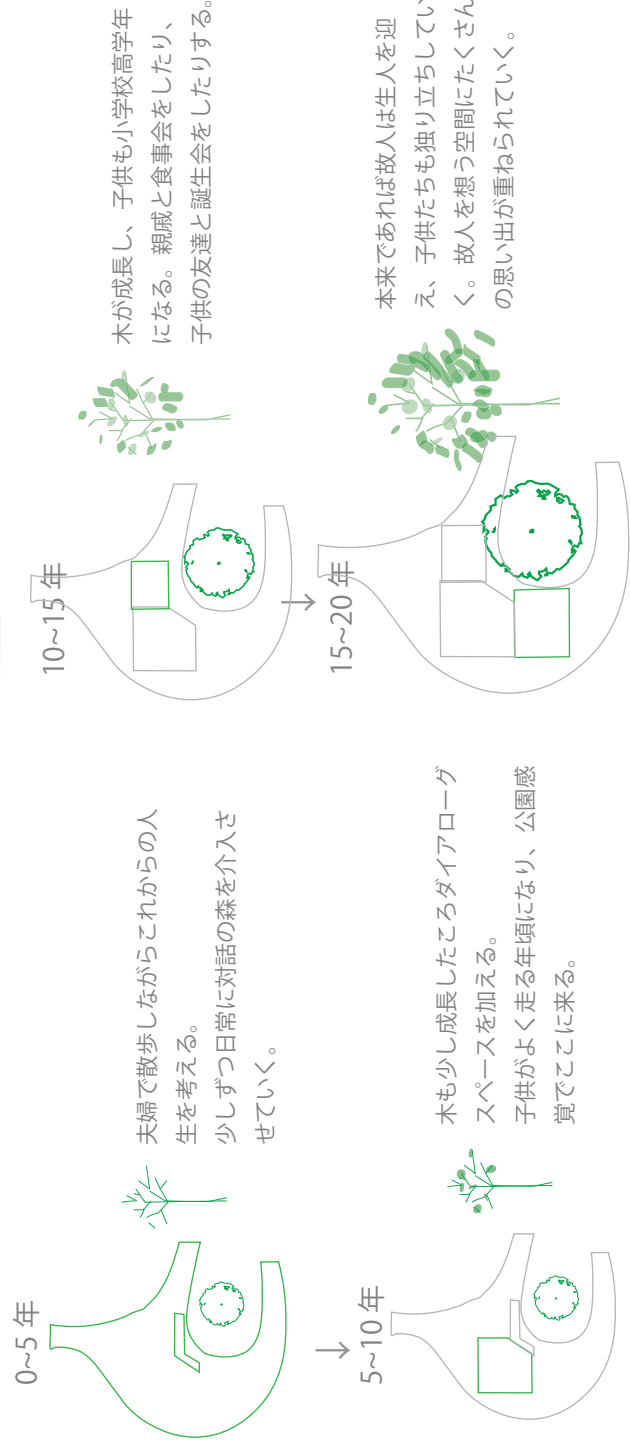
— 櫻 —

例)

依頼人：20代夫婦

目的：亡くなった子供を想うため

理由：生後すぐ亡くなったため形にしたい



木は立派な木として成長し、夫婦二人だけの時間をここで過です。故人を想い、一緒に年を取り、建築もゆっくりと朽ちながら使われていく。夫婦がこの世を去るころ建築も森に滲んでいく。

